

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 千賀由佳

本論文では、明末から清初の時期にかけて成立した長編白話小説『西遊記』(第一章)、『三宝太監西洋記』(第二章)、『平妖伝』(第三章)、『禅真逸史』(第四章)、『帰蓮夢』(第五章)の五作を主な対象に、神異を發揮する「神僧」たちの描かれ方に着目し、前代の作品から何を継承し、どのような新たな展開が見られるか等の問題につき検討している。

いくつかの例を挙げるならば、百回本『西遊記』にあらわれる「聖僧」「神僧」の語に着目し、唐代以降に広まった羅漢信仰に関わる「聖僧」と、「神化万変」する「神僧」との差異の指摘(第一章)。『三宝太監西洋記』に多く見られる仏典からの引用句の出所を調査し、宋代までの仏典では『金剛経』『六祖壇経』『宗鏡録』、明代の書物では『十牛図』『象教皮編』と、特に注目すべき一致があったことの指摘。また作者の羅懋登が明末に出版された通俗的な仏教書を参照していたこと(第二章)など、いずれの章においても重要な指摘を見ることができる。

こうした個別の箇所での指摘とともにすぐれるのが、これら全体を通して終章に示される、小説史上の見通しである。

『西洋記』において、『神僧伝』をはじめとする僧伝中の神異僧の特徴と、『西遊記』等先行する文学作品中の神異描写が組み合わされ、神通力を有する僧侶像が一つの完成を見たとする。そして、通俗小説中の僧侶像は『平妖伝』(特に四十回本)において、僧侶の使う術に道教や民間呪術に由来する要素が目立つようになり、『水滸伝』魯智深の影響により、豪傑的な神異僧があらわれたりと、大きな変化を見せたことを指摘する。さらに、明末の世相が反映されていると見られる『禅真逸史』や『帰蓮夢』では、僧侶による人助けの場面で現実味と具体性をもって描かれ、明末社会におけるすぐれた僧侶の出現への期待の表れであろうとする。

これら諸作品の作者はいずれも仏門中の人物ではないようであるが、小説中には仏典名や仏教書からの引用句、書き手による仏教の評価や理解が含まれ、明末に出版された仏典や通俗的仏教書によって民間に仏教の知識が浸透したことを物語っている。通俗小説における神異と僧侶をめぐる記述を通し、当時において僧侶がどのような存在として捉えられていたか、また仏教を含む民間の宗教信仰がどのように受容されていたかの状況をも示している。

審査では、各作品についての書誌学的考察、仏典の取り扱い等に改善の余地があることが指摘されたが、全体の価値を損なうものではなく、本論文によって明らかにされた、明清通俗小説における神僧像は、その小説史上の位置づけとともに、仏教を含む民間宗教のあり方への展望も示すものであり、白話小説作品研究の新たな展望を開いたものとして、博士(文学)の学位に十分値するとの結論に至った。